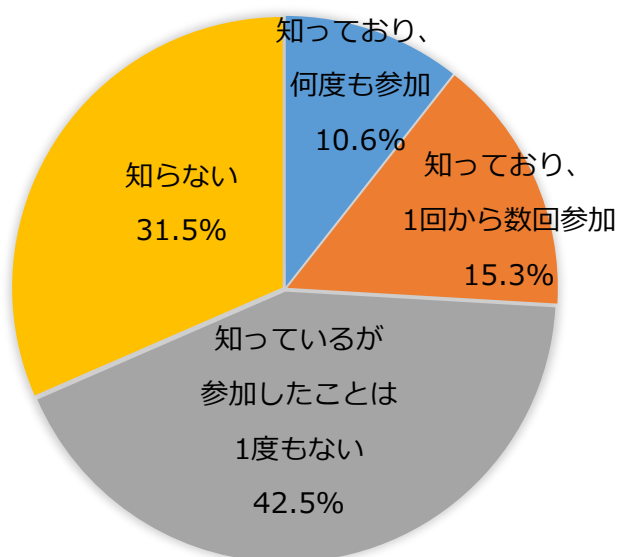


7. 周囲の人々や社会との関係

■ピアミーティングの認知や参加経験

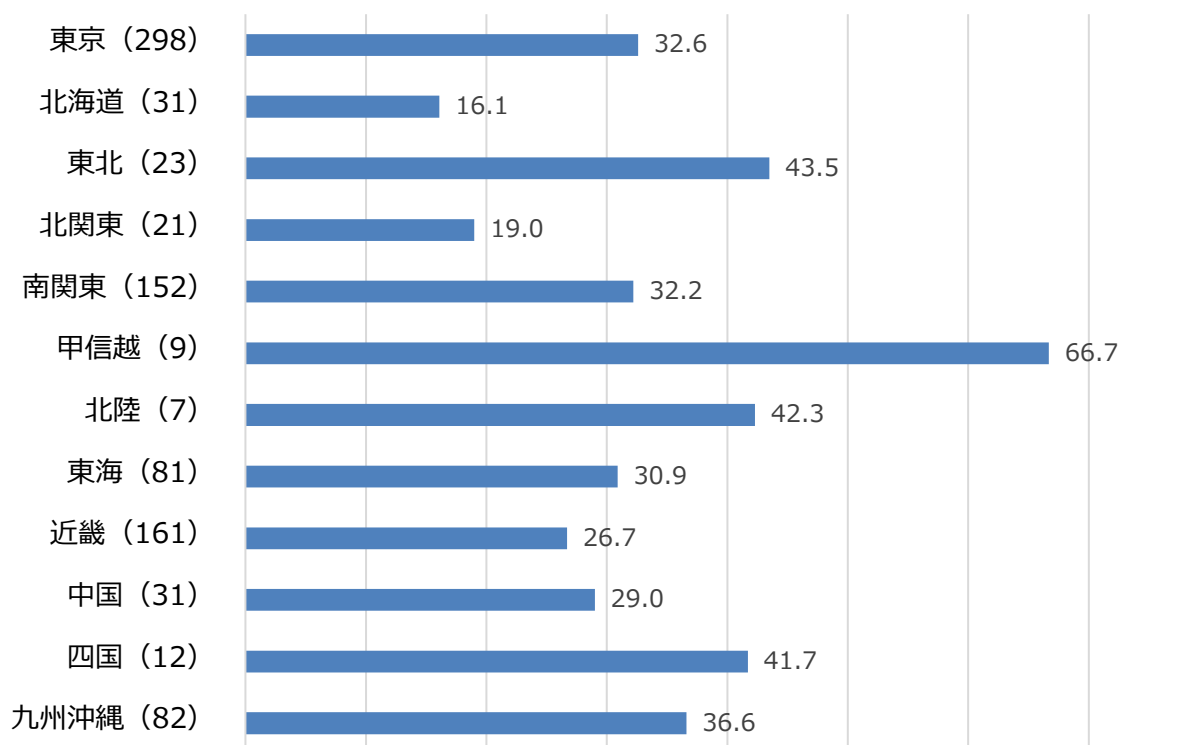
同じ HIV 陽性者同士が同じ立場で相互支援していく場を「ピアミーティング」等と呼びます。こうしたピアミーティングについて、「知っているが参加したことは 1 度もない」と回答した人が最も多く、43%でした。参加経験がある人は、参加回数を問わないと合わせて 26%でしたが、「何度も参加している」のは 11%にとどまりました。「知らない」と回答した人は 31%でした。

図 7-1 ピアミーティングの認知と参加経験 (n=908,%)



ピアミーティングを「知らない」と回答した割合を地域別にみてみたところ、地域別の回答者数にばらつきがあるので比較は難しいですが、北海道と北関東で少なく、甲信越で多い傾向がありました。

図 7-2 地域別のピアミーティングの認知と参加経験 (n=908,%)



■ピアミーティングがどんな場であれば参加したいか？

ピアミーティングがどんな場であれば参加したいかについては、「同じような立場の HIV 陽性者と会える場」が 36.6%と最も多く、ついで「気が合う人と会える場」29.6%、「メンバー間の人間関係の良さが感じられる場」26.2%と、その場で得られる人間関係を重視する回答が多くなっていました。次いで「日々の生活や療養に役立つ情報が得られる場」、「自分が HIV 陽性者であることが他の参加者に受け入れられる場」「面白いと感じられる場」、「参加する必要性が自分にあると感じられる場」、「多様な情報が集まる場」など、内容に関する回答が続きました。「スケジュールが合わせやすい場」、「地元の人と会わずにすむ場」等の利便性については、10%台でした。「家や職場等の近くで開催される場」は 8.5%と最も少なくなっていました。

表 7-1 ピアミーティングがどんな場であれば参加したいか？ (n=908,複数回答 ,%)

	%
同じような立場の HIV 陽性者と会える場	36.6
気が合う人と会える場	29.6
メンバー間の人間関係のよさが感じられる場	26.2
日々の生活や療養に役立つ情報を得られる場	25.3
自分が HIV 陽性者であることが他の参加者に受け入れられる場	21.5
面白いと感じられる場	20.4

参加する必要性が自分にはあると感じられる場	19.7
多様な情報が集まる場	19.4
パートナーが見つかる場	17.2
自分の話を他の HIV 陽性者に聞いてもらえる場	16.4
多くの HIV 陽性者が参加する場	15.9
スケジュールが合わせやすい場	15.7
地元の人と会わずにすむ場	12.1
家や職場等の近くで開催される場	8.5
その他	1.7

ピアミーティングがどんな場であれば参加したいかに関する自由回答では以下のような回答がありました。HIV 陽性者に限定したものでないコミュニティへの参加希望がある一方で、個人情報を守られる、顔を合わせず参加できる、アバタービデオ通話の使用等、プライバシーを心配する声もありました。

表 7-2 ピアミーティングがどんな場であれば参加したいか？（自由回答）

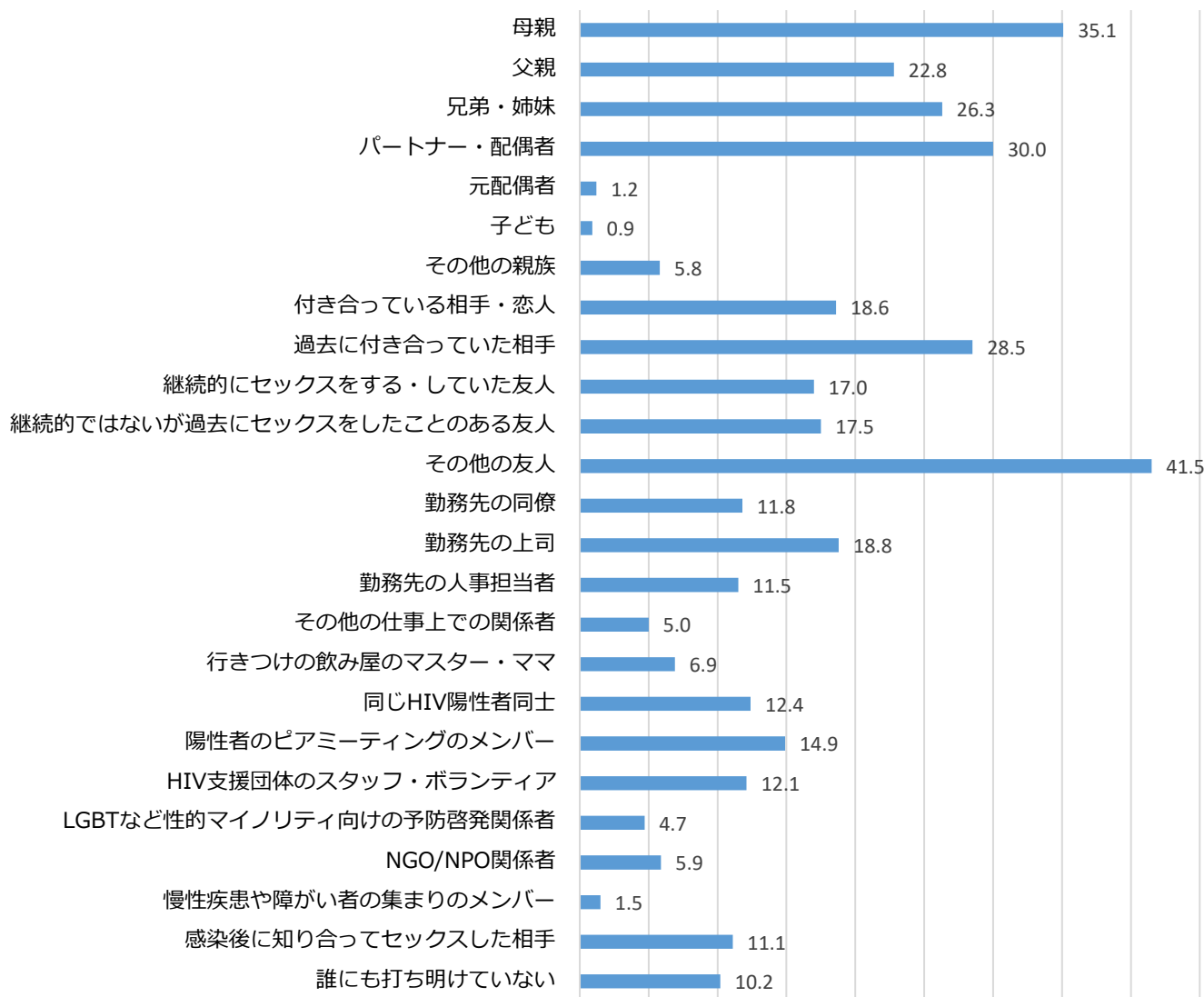
曜日固定の会が多く、参加しにくい
オープンな形で陽性者に限定したものでないコミュニティなら参加したい。閉鎖されたコミュニティは HIV を特別な病気と捉えているようで参加する気はしない
快樂を中心にしない人間関係・知的環境に長年いる人
医学的知識を高められる場であれば
まとめ役がいてくださる方が楽です
経済的状況が似通っていたり、同じ所得層の人が集まる場
確実に個人情報が守られる場
あっても知られるので参加するのが怖い
同世代の陽性者が集まれる場
顔を合わせずに会える場
個室、音声変換、アバタービデオ通話のように完全に個人の特定が難しい環境でのやりとりなら安心して参加できるかも
そういう会合にはまったく興味なし
参加人数が少ない場
参加したいけど gay の方が多く、妻が嫌がってしまい数回しかいけなかった

■ HIV 陽性者であることを伝えること

908 人中、815 人（89.8%）が、HIV 陽性であることを少なくとも 1 人以上に伝えていました。伝えた相手としてもっとも多くあげられたのは、その他の友人（性的な関係がない）で 41.5%、次いで、

母親 35.1%、パートナー・配偶者 30.0%、過去に付き合っていた相手 28.5%という結果でした。誰にも打ち明けていない人は 10.2%で、第 2 回調査の 8.9%よりも多くなっていました。

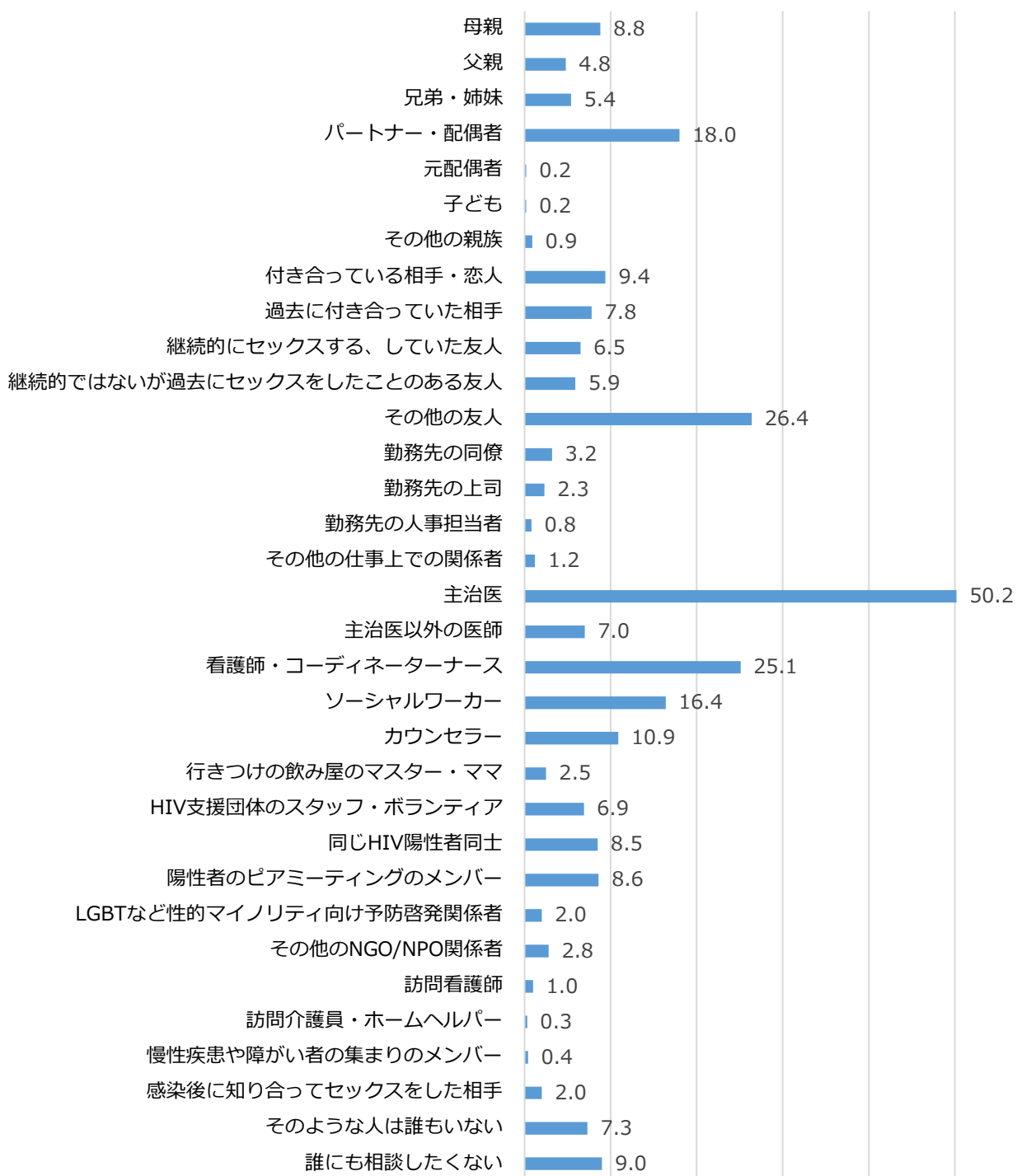
図 7-3 HIV 陽性者であることを伝えた相手 (%、n=908, 複数回答)



■ HIVに関連した悩み事の相談相手 (図 7-4)

HIVに関連した悩み事の相談相手として、もっとも多くあげられたのは主治医で、50.2%と半数を超えていました。次いで、その他の友人が 26.4%、看護師・コーディネーターナースが 25.1%、という結果でした。医療従事者が多い傾向は、第 2 回調査と同様でした。「そのような人は誰もいない」と回答した人が 7.3%でした。(第 2 回調査は 8.5%) 一方で「誰にも相談したくない」と回答した人は 9%で、第 2 回調査の 6.9%より多くなっていました。

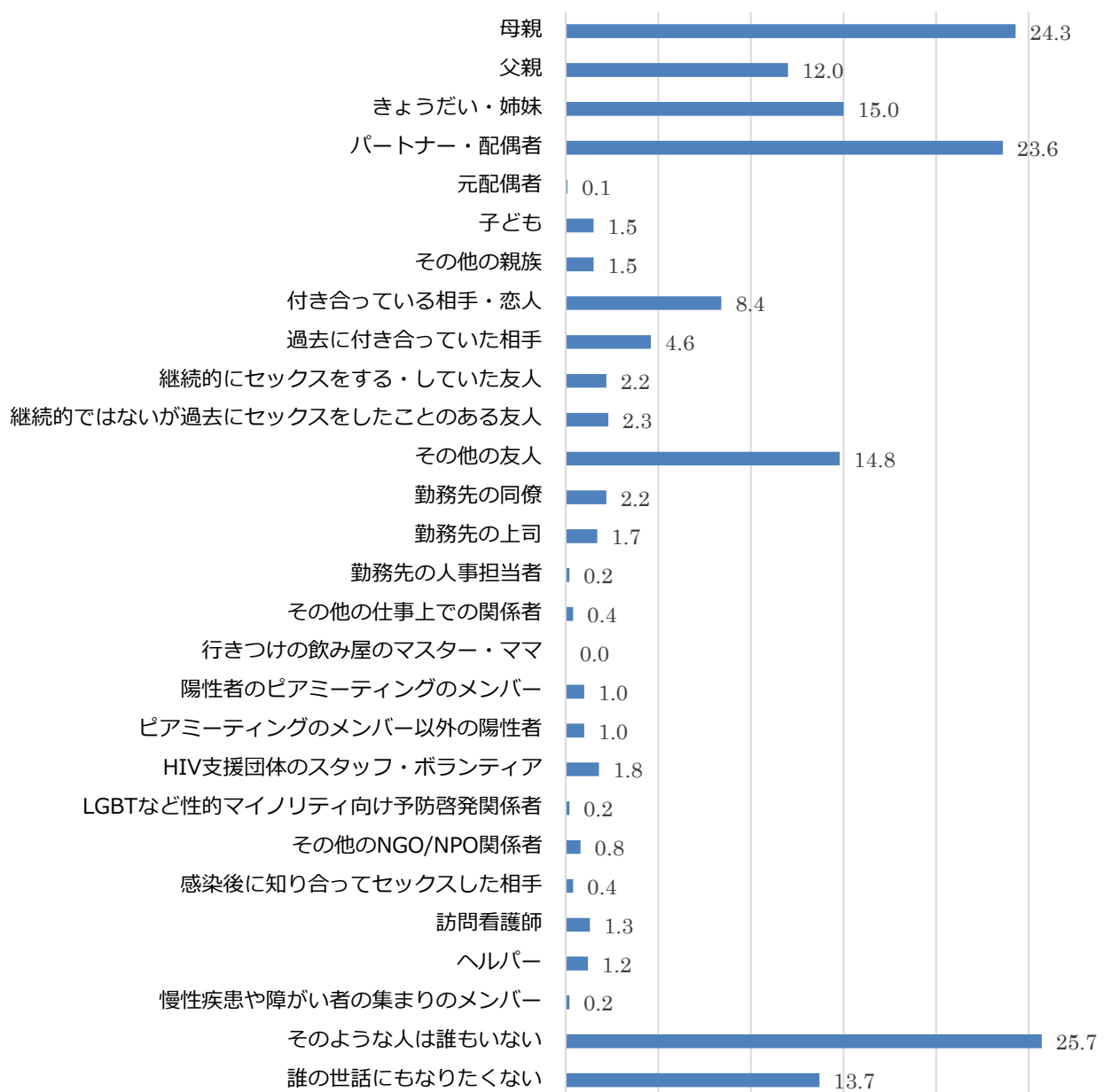
図 7-4 HIVに関連した悩み事の相談相手（%, n=908, 複数回答）



■必要時に病院への付き添いや介助をしてくれる人（図 7-5）

「そのような人は誰もいない」と回答した人がもっとも多く、25.7%でした。次いで母親が 24.3%、パートナー・配偶者が 23.6%と、多くなっていました。「HIV 支援団体のスタッフ・ボランティア」は 1.8%、「ヘルパー」が 1.2%であり、家族やパートナー以外をあげる人は少ない状況にありました。また、13.7%が「誰の世話にもなりたくない」と回答していました。第 2 回調査とほぼ同様の傾向で、引き続き、体調が変化した際のサポート源が十分ではない可能性が伺えます。

図 7-5 必要時に病院への付き添いや介助をしてくれる人（%, n=908, 複数回答）



■ HIVに関連するスティグマ

HIVに関連するスティグマとは、「HIVやAIDSとともに生きている、あるいは関連のある人を低く評価するプロセス」(UNDS,2003)とされ、HIV陽性者に対する不公平・不正義な扱いへとつながり、差別や偏見を生じさせていることが指摘されています。

この調査では、スティグマを「HIVに対する社会からのスティグマの感じ方」、「HIVに対するスティグマにまつわる経験の多さ」、「スティグマを避けるための行動の自主規制」の3つの側面から確認しています。

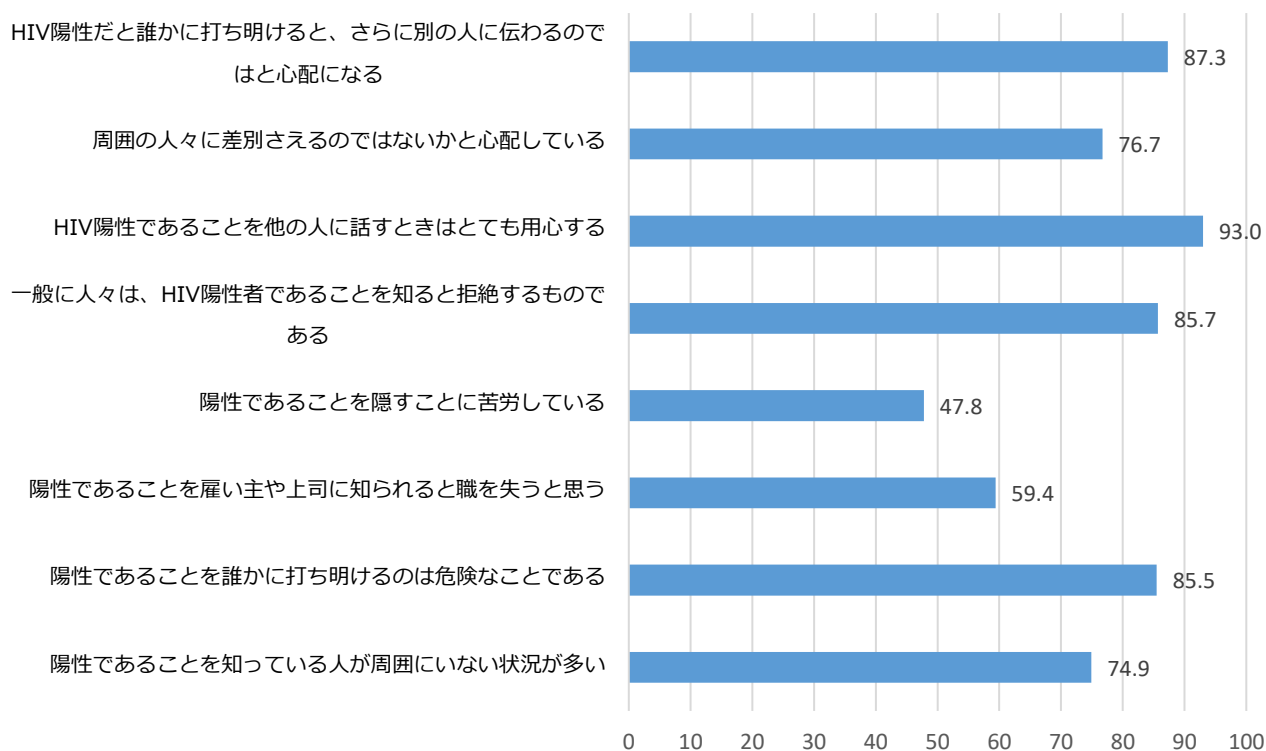
■ HIVに対する社会からのスティグマの感じ方 (図7-6)

HIVに対する社会からのスティグマについてどのように感じているかを8項目で質問しました。各質問は、「まったくそうではない」「あまりそうではない」「ややそうである」「とてもそうである」の4段階で回答頂きました。「ややそうである」「とてもそうである」を「そうである」とし、その割合(%)を示します。

「HIV陽性であることを他の人に話すときにはとても用心する」と回答したのは、93%に達していました。「一般に人々はHIV陽性であることを知ると拒絶する」という人は85.7%、「HIV陽性だと誰かに打ち明けるとさらに別の人に伝わるのではと心配になる」という人が87.3%であり、ほとんどの人が、HIV陽性を知られることに強い不安や心配を感じていることが伺われました。

さらに、「HIV陽性であることを雇い主や上司に知られると職を失うと思う」と感じている人は59.7%であり、第2回調査の62.9%よりやや低下しているものの、HIV陽性であることを知られることに対する恐怖を職を失うといった具体的なものとして捉えている人が半数以上であることがわかりました。

図 7-6 HIV に対する社会からのスティグマの感じ方(%, n=908,項目により 1-2 名に欠損あり)

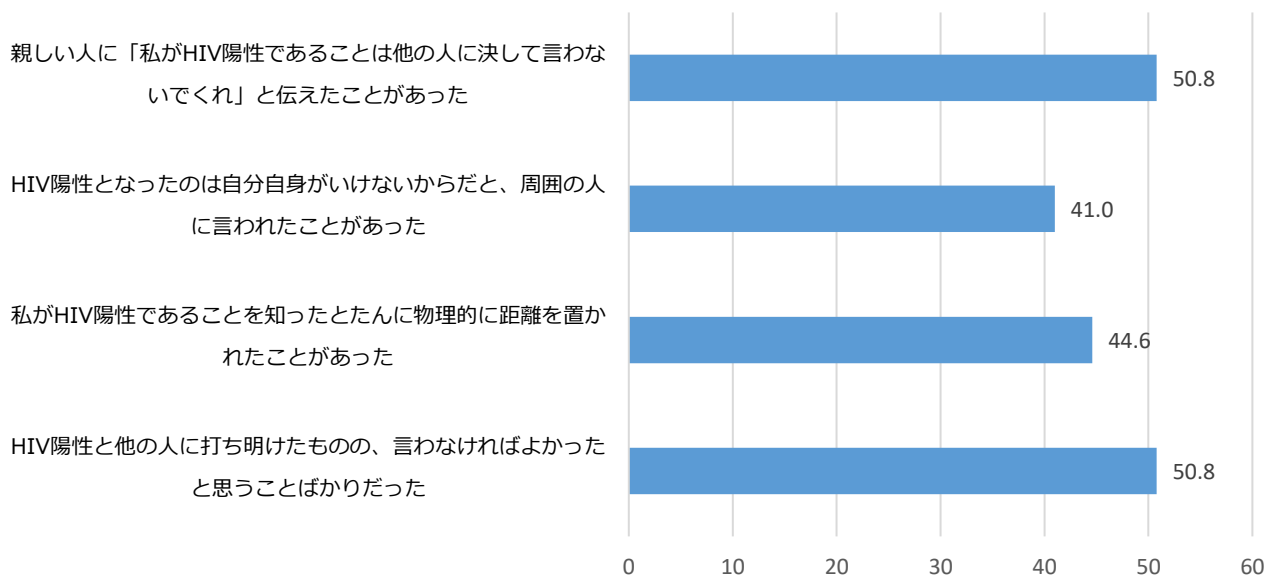


■ HIV に対する社会からの偏見にまつわる経験 (図 7-7)

実際に HIV に対する偏見を感じるような経験をしたかどうかを 4 項目で質問しました。各質問は、「まったくそうではない」「あまりそうではない」「ややそうである」「とてもそうである」の 4 段階で回答して頂きました。「ややそうである」「とてもそうである」を「そうである」とし、その割合 (%) を示します。

「HIV 陽性と他の人に打ち明けたものの、言わなければよかったと思うことばかりだった」、「親しい人に「私が HIV 陽性であることは他の人に決して言わないでくれ」と伝えたことがあった」に対してそれぞれ 50.8%と半数以上が「そうである」と回答していました。「HIV 陽性になったのは自分がいけないからだ、と周囲の人に言われたことがあった」等、HIV 陽性であることによるネガティブな実体験が 4 割程度の人にはありました。

図 7-7 HIV に対する社会からの偏見にまつわる経験 (%、n=908、項目により 1-2 名に欠損あり)



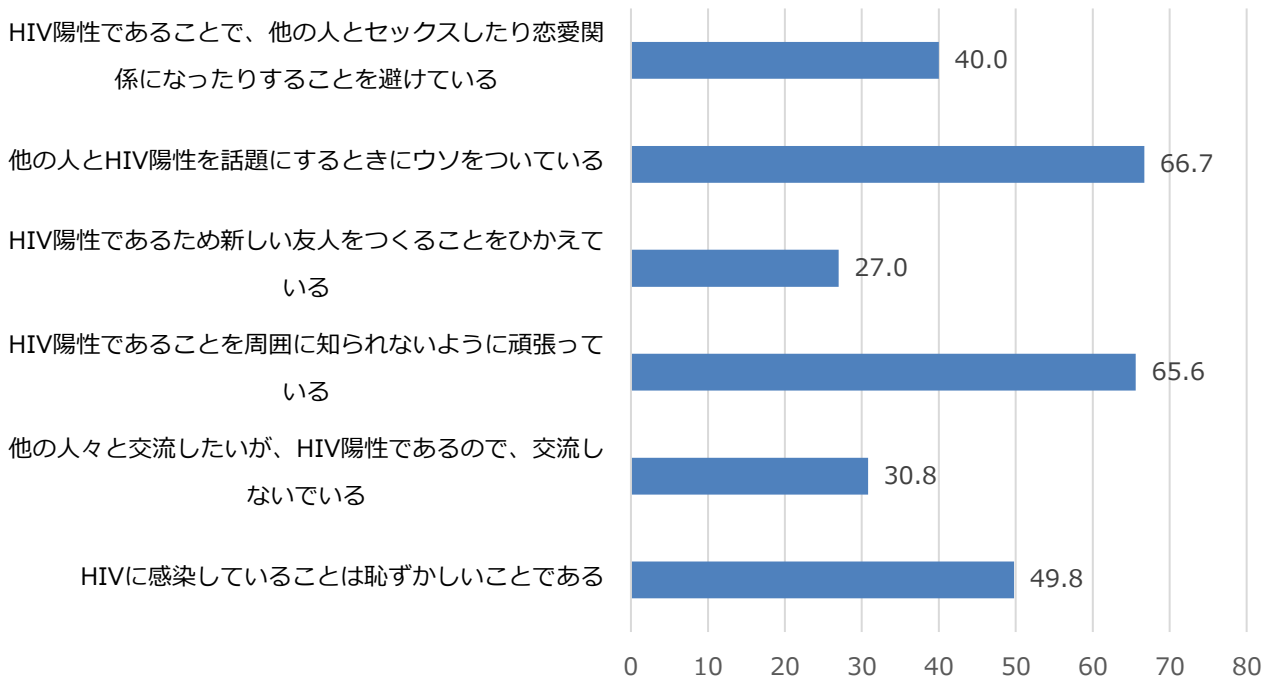
■ HIV に対する社会からの偏見による行動の自主規制 (図 7-8)

HIV に対する社会からのスティグマを感じ、そのために、自らの生活について自主規制としてとらざるを得ない行動について 6 項目で質問しました。各質問は、「まったくそうではない」「そうではない」「どちらともいえない」「ややそうである」「とてもそうである」の 5 段階で回答する形式です。「ややそうである」「とてもそうである」は、「そうである」とし、その割合 (%) について結果を示します。

「他の人と HIV を話題にするときウソをついている」のは 66.7%、「HIV 陽性であることを周囲に知られないように頑張っている」のは 65.6%であり、HIV 陽性であることを周囲に隠すために「嘘をつく」「頑張る」などの行動を自主規制している人は 6 割以上にのぼっていました。

一方で、「他の人々と交流したいが、HIV 陽性であるので、交流しないている」では、「そうである」は 30.8%、「HIV 陽性であるため新しい友人をつくることをひかえている」では、「そうである」が 27.0%であり、他の人々との交流を実際に控えている人は、3 割程度に留まっていました。しかし、「HIV 陽性であることで、他の人とセックスしたり恋愛関係になったりすることを避けている」については 4 割の人が自主規制を行っている状況にありました。また、約半数の人 (49.8%) が、「HIV に感染していることは恥ずかしいことである」と回答していました。

図 7-8 HIV に対する社会からの偏見による行動の自主規制(%、n=908、項目により 1-2 名に欠損あり)



■ゲイ・バイセクシャル・レズビアン・トランスジェンダーに対するスティグマについて (図 7-9)

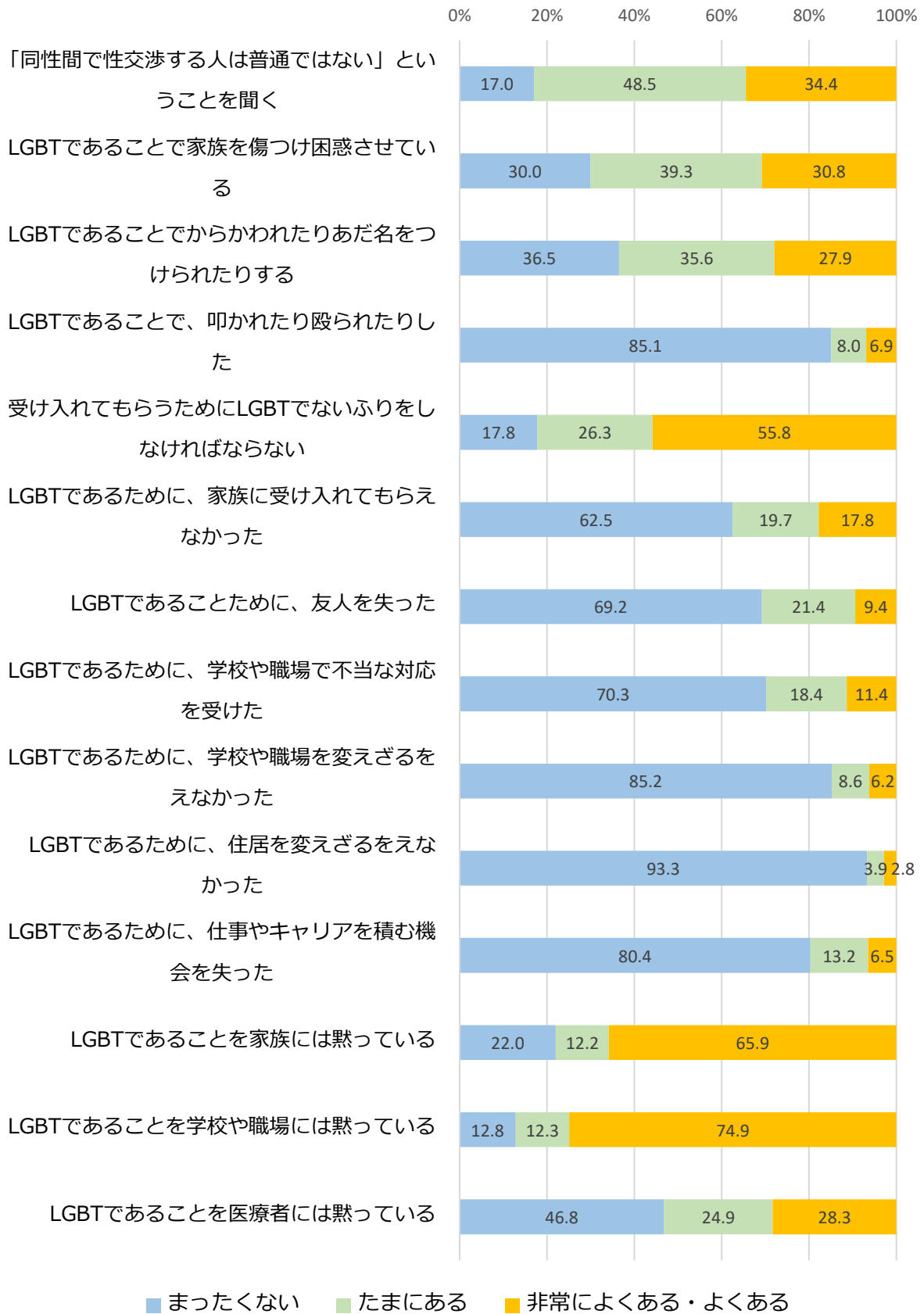
性的指向や性自認に目を向けて、ゲイ・バイセクシャル・レズビアン・トランスジェンダー (以下 LGBT) に対する偏見に関連する状況について 14 項目で質問しました。各質問は、「まったくない」「たまにある/あった」「よくある/あった」「非常によくある/あった」の 4 段階の回答形式となっています。「よくある/あった」と「非常によくある/あった」を統合して「よくある」とし、「まったくない」、「たまにある/あった」、「よくある」の 3 つとし、結果を示しています。セクシャリティに関する質問でヘテロセクシャル、わからない、決めたくない、その他と回答した 69 名を除外した 839 名の回答を集計しました。

「LGBT であることを家族には黙っている」では、「よくある」が 65.9%であり、6 割以上が家族に LGBT であることを隠していました。また、「自分が LGBT であることで、家族を傷つけ困惑させていると感じる」では、「たまにある」「よくある」を合わせると 7 割を超える結果でした。一方で、家族に自身のセクシャリティを隠していることが多いことが影響している可能性があります。「LGBT であるために、家族に受け入れてもらえなかった」では、「よくある」は 17.8%とそれほど多くはありませんでした。

家族以外との関係については、「受け入れてもらうために、LGBT でないふりをしなければならない」で、「よくある」は 55.8%であり、6 割近くの人が受け入れてもらうために、LGBT であることを隠すための行動をとらざるを得ない状況にありました。「LGBT であるために、友人を失った」では、「よくある」は 9.4%、「まったくない」は 69.2%であり、友人関係への影響は比較的少ない様子でした。「LGBT で

あることを学校や職場の人には黙っている」では、「よくある」は74.9%であり、学校や職場といった場では、LGBTであることは公にしない人が多いことが伺えました。LGBTであることを医療者には黙っている」では、「よくある」は28.3%、「まったくない」は46.8%であり、半数近くの人が医療者にLGBTであることを伝えていることがわかりました。

図 7-9 LGBT に関するスティグマ (%、n=839,項目により 1-3 名の欠損あり)

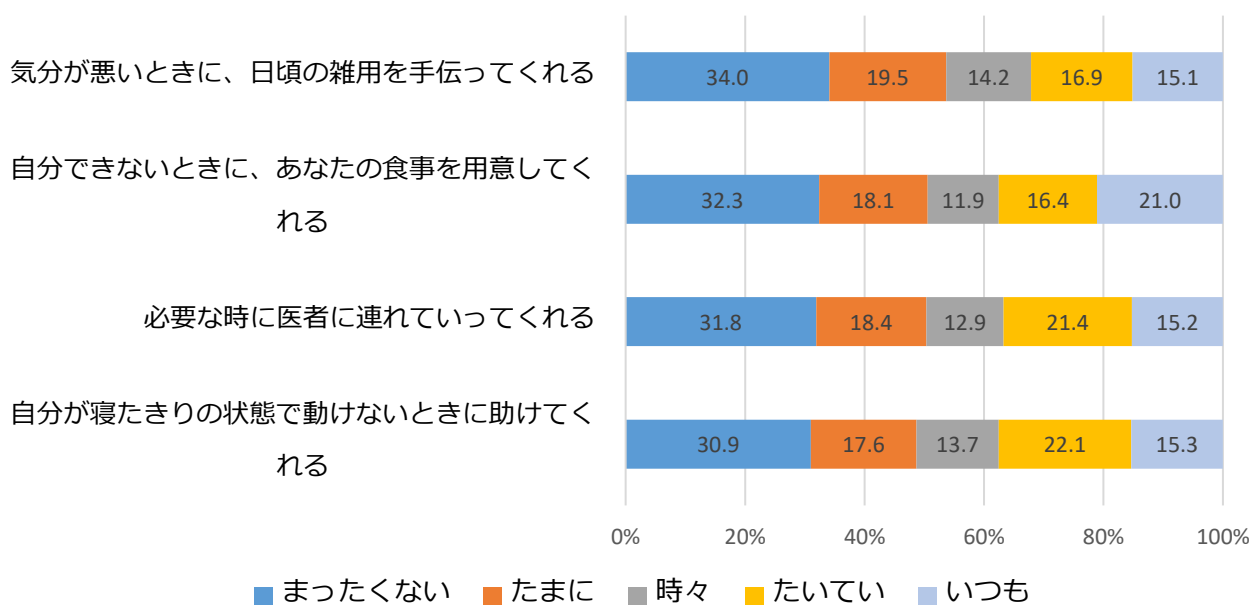


■ソーシャルサポート

体調を崩してしまった等の困ったときに助けてくれたり、一緒に楽しい時間を過ごしたり、周囲の人々からの有形無形のサポートをソーシャルサポートといいます。今回の調査では、ソーシャルサポートを移動の助けをしてくれる、食事を用意してくれる等の手段的サポート、一緒に楽しいときを過ごしてくれる、アドバイスをしてくれる等を情緒的サポートの2種類をそれぞれ4項目ずつ、「全くない」「たまに」「時々」「たいてい」「いつも」の5段階でお答え頂きました。

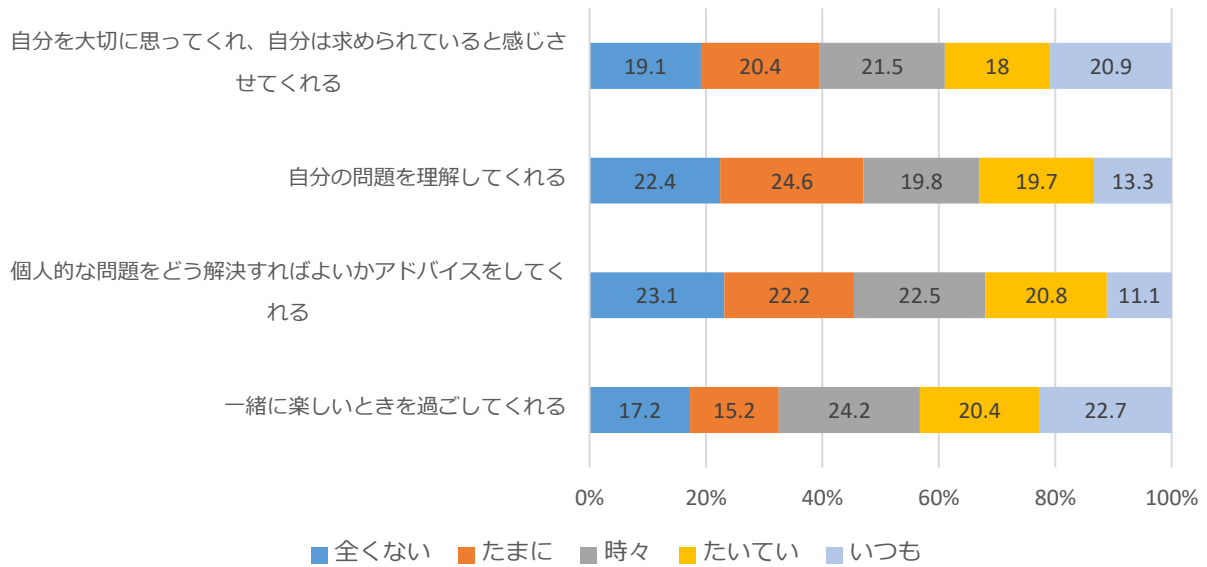
手段的サポートについては、すべての項目で3割が「まったくない」と回答していました。体調を崩すなどのサポートが必要な状況において、サポートが十分得られない可能性があります。

図 7-10 ソーシャルサポート：手段的サポート（%, n=905）



情緒的サポートについては、全ての項目で「まったくない」と回答したのは、20%程度で、手段的サポートよりも低い結果となりました。「一緒に楽しいときを過ごしてくれる」については、半数近くが「たいてい」「いつも」と回答していました。

図 7-11 ソーシャルサポート：情緒的サポート（％，n=905）



手段的サポートと情緒的サポートの4項目の合計点を100点換算で算出し、一般住民の調査結果と比較した結果を紹介します。男女別に比較をするため、Futuresでは性別の質問に回答のあった898名（男性877名、女性21名）のデータを用いました。一般住民は2014年に実施された全国調査サンプル（2066名）のデータを用いています。

男女ともに一般住民と比較して、ソーシャルサポートの得点が低く、サポートが少ないことが伺われました。また、Futuresの対象者は、一般住民と異なり、男女ともに手段的サポートよりも情緒的サポートが高くなっていました。

表 7-3 一般住民と比較したソーシャルサポートの合計得点

		一般住民	Futures
		平均±標準偏差	平均±標準偏差
合計点	男性	70.2±25.0	45.3±30.2
	女性	71.5±23.6	48.0±29.2
手段的サポート	男性	73.4±27.7	42.4±35.1
	女性	71.8±26.5	42.5±36.5
情緒的サポート	男性	67.0±25.3	48.1±30.8
	女性	71.2±24.9	54.5±28.5